大英博物館所蔵の敦煌発見「父母恩重経変相画」（〈画英〉）について

新井慧誉

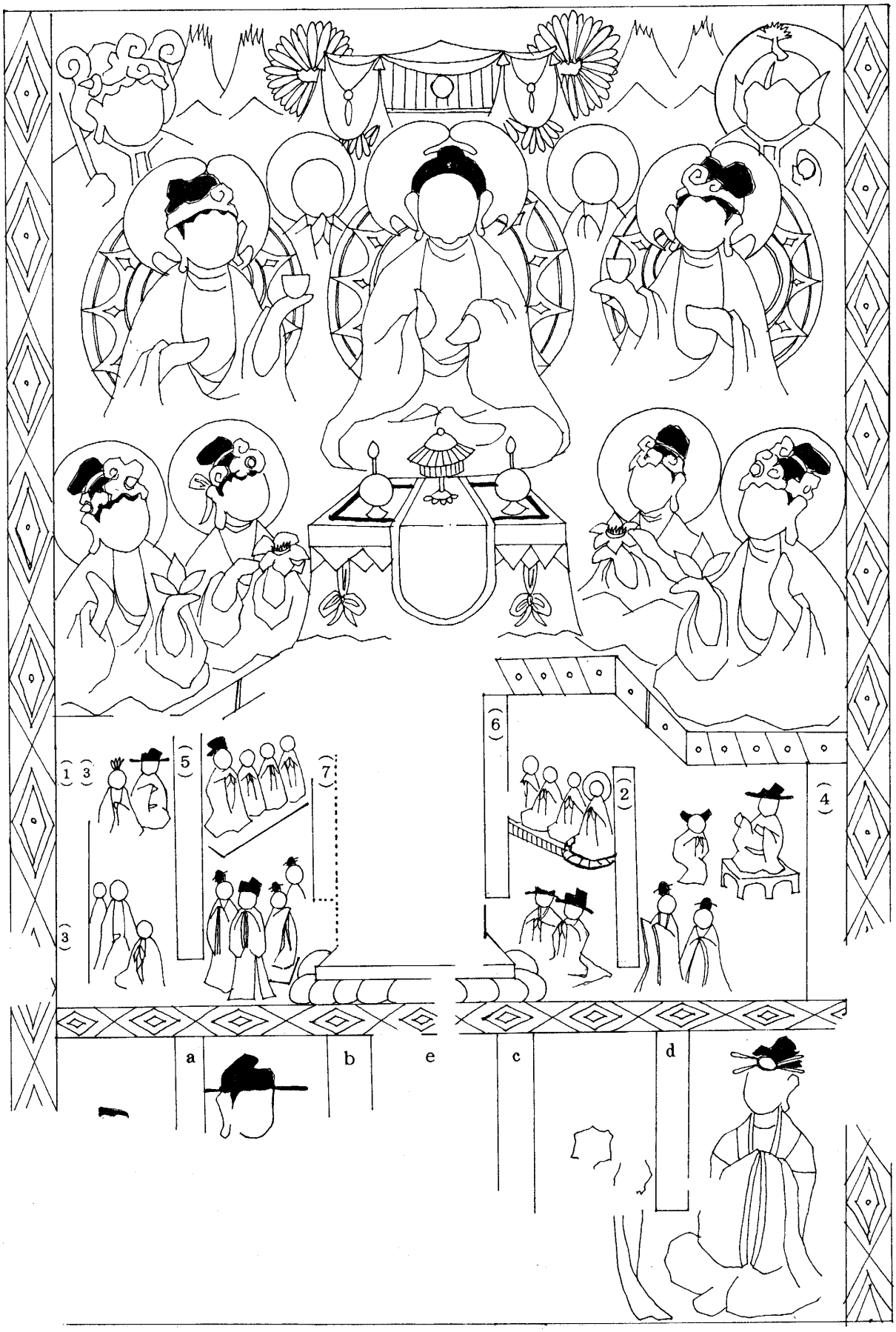
敦煌で発見された文物には、文書の他に図画も含まれている。『父母恩重経』を題材とした図画としては、莫高窟の壁画の他に画軸が二幅知られている。中国の甘粛省博物館所蔵の一幅（〈画甘〉と略称[1]）と、イギリスの大英博物館所蔵の一幅（〈画英〉と略称[2]）とである[3]。本論文では後者の〈画英〉をとりあげる。

〈画英〉には若干の文章が記され残されている。そのいくらかは『父母恩重経』の経文と思われる。そこでその経文を精査することで、いかなるテキストに基づき〈画英〉が画かれているかが判定できる。本論の問題の所在とするところである。

〈画英〉の構成

〈画英〉はいわゆる変相画である。絹本著色の縦長の絵で、縦一三四センチ、横一〇二センチである。スタインが敦煌で蒐集した仏画のひとつで、〈SP67－68〉の番号が付されている。

〈画英〉は上下の二段構成でできている。すなわち絵の全体は太めの帯でふちどりされていて、その帯の内側はいくつもの菱型が並んでおり、菱型は褐色と橙色のものが交互に数珠つなぎにつづいている。絵は上方より四分の三下ったところで同


1
3
5
7
6
2
4
3
a
b
e
c
d

じ図柄の帯で仕切られており、もって上下二段が区分けされている。結果として上段は、ちょうど正方形のスペースになっている。そこで上下二段の構成といっても、両者は面積的に三対一の差があることになる。

上段は仏の「説法会」の場面で、正方形である。上部のほぼ三分の二と下部の三分の一との間に変形の横帯状の仕切りがあり、それによって上部と下部の段差を示している。つまりその段差により、上部が堂内の内陣であることを表しているのであろう。

上段の上部の中央に、主尊が説法印と思われる印を結んで結跏趺坐している。釈迦如来であろう。主尊の頭上には天蓋が配され、その両側には山が二つずつ横に描かれている。『父母恩重経』が説かれた王舎城の耆闍崛山を表しているのは明らかである。

主尊の光背は頭光と身光から成り、両者とも円形であるが、そこにほどこされた図柄は別である。その幾何学的な描きかたと図柄は〈甘画〉の主尊の場合と同一であり、両者の製作背景なり時代が共通していることを示している。光背が幾何学的な文様に顕著となったのは一〇世紀以前からであるとのことだが、[4] まさに〈甘画〉の製作が淳化二年（九九一）であることからみても、〈英画〉の製作時期は一〇世紀と考えて大差ないものと思われる。

主尊の背後左右には比丘が一人ずつ合掌して立ち、主尊のほうを向いている。右側すなわち向かって左側は迦葉、左側すなわち向かって右側は阿難と思われる。

主尊にあい並んで左右に菩薩が坐し、主尊に顔を向けている。脇侍の菩薩であろう。この二菩薩は主尊とほぼ同じ大きさに描かれているが、主尊ともどもこの法会の中心存在であることは、光背の頭光が主尊と同じデザインであることからみてもわかる。すなわち三尊像を形成しているようである。二菩薩とも片方の手に供物を持ち、主尊に捧げようとしている。

二菩薩のすぐ上方外側に、甲冑に身を包んだ像が一体ずつ主尊に向かって立っている。四天王のうちの二体であろうが、あとの二体は全体の構図上から描けなかったものと思われる。とにかく四天王が法会全体をガードしていることを表してい

る。

主尊の前には大きめの机があり、置きものの法具が三点みられる。そしてその前机の左右には菩薩が二人ずつ計四人坐っているが、三尊の二菩薩に比べて姿は小さく画かれている。四人とも手に花を持ち、主尊に向かってさし出している。この四人の頭光は、三尊の二菩薩のそれとは異なったデザインであるのが特徴である。

以上が内陣の様子である。それに対して上段の下部は、説法の聴衆と説法の内容が図画されており、かつ説法が短い経文で若干記されている。

下部の中央は主尊の前机のすぐ下に位置するが、そのほとんどは残念ながら破損している。その部分には『父母恩重経』を記すパネルが衝立の形で描かれていたと思われる。それは最下部に、衝立の蓮台と思われるものが残っていることから明らかである。主尊の前机の下部に経典をパネル状で記すという形式は〈甘画〉と同じであり、その点からも両者の成立は同時期であることを示している。〈甘画〉の場合の経典は「佛説報父母恩重経變」と題され、経典というよりむしろ変文であることを自称している。はたして〈英画〉にはいかなる『父母恩重経』または変文が記されていたのであろうか。パネルの大きさからみて、一行二〇字で一〇行程度の規模のものと想像できるので、恐らく〈甘画〉と似たりよったりの規模であったかと思われる。

パネルの左右には説法の聴衆が都合十二名描かれている。右側すなわち向かって左側には細長い座布が敷かれ、奥より比丘尼が三名、その手前に正装した俗人男子が一名坐っている。その座布より下方に小さな別の座布が敷かれ、そこには正装した俗人女子が二名坐っている。一方、左側すなわち向かって右側にも細長い座布が敷かれ、奥より比丘が三名坐っている。さらに、その手前にも比丘が一名、丸い座布団の上に坐している。そしてそれら四名の下方にはやはり小さな座布が敷かれ、正装した俗人男子二人が坐っている。このように六名ずつが左右に配置され、相向きあっていずれも合掌している。

十二名の聴衆の背後には説法の内容が図画されている。全部で五景から成っている。右側に三景、左側に二景である。

ところで下部の説法の聴衆と説法の内容のあい間に六本の短冊が設けられ、そこに経文の抜粋が二行ずつ記されている。その経文を調査し、『父母恩重経』の諸テキストにおいていかなる位置に配当されるのであるか、それが既述のように、本論文の研究テーマなのである。

〈画英〉の下段は、この変相画を製作し供養した者と、その廻向対象である父母の画像と、および願文などが記されている。しかし全体の五分の三は完全に破損し失われている。

下段は縦に五分割されているが、それは途中に四本の短冊が設けられていることからわかる。中央は願文が記されていたようであり、若干ながら文字が残されている。この位置に願文を記すのは〈画甘〉の場合と同じであり、恐らく当時の変相画の定型パターンだったのであろう。

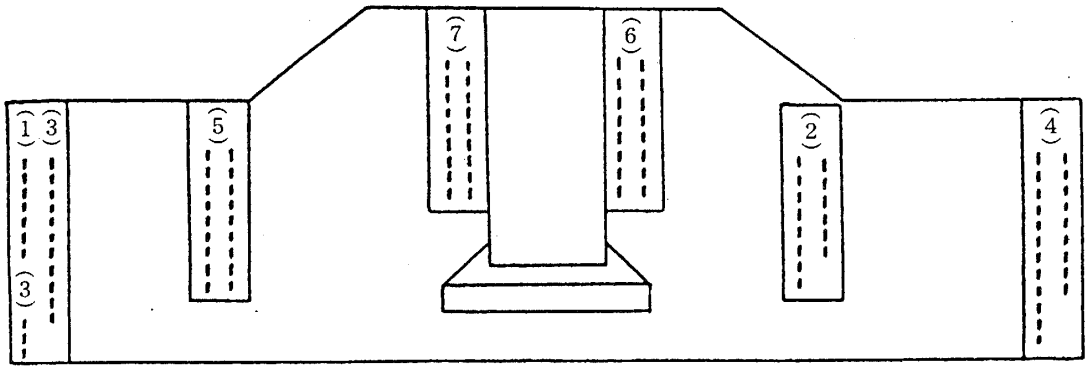
中央の願文に対して右側すなわち向かって左側には、まず供養主の亡父の絵像、そしてその背後に供養主自身である男子の絵像がみられる。もっとも供養主は、頭部のかぶりものと思われるもののごく一部だけが残存している。また左側すなわち向かって右側には供養主の母親の絵像が、そしてその背後には娘がそれぞれ座布の上に坐っている。二人とも正装している。右側の亡父と供養主の絵像は大半が破損していて、衣装や姿勢が不明であるが、女性達と同様に正装した坐位で描かれているとみるのが自然であろう。

以上がこの変相画の構成内容である。

経文の検討

すでにふれたごとく、上段下部の説法の聴衆と説法の内容のあい間に六本の短冊があり、それぞれに経文が記されている。左右両端の短冊二本は黄色を帯び、他は褐色である。経文はすでに松本栄一氏が判読し発表されているが、[5] いまはその掲載

方法を踏襲しつつ、しかしその判読内容を修正しながら改めて記してみたい。短冊内のカッコ付き数字は経文番号であり、松本氏が便宜上付されたものをそのまま採用する。



（上段下部の短冊見取図）

(4)
八斛四斗計論母恩昊天冈極云何可報
父母養児去離蘭車十指甲中應□□□淨應各有

(2)
非母不哺渇時須飲非母不乳
父母懷抱和ㄑ弄聲含咲未語飢食須食

(6)
□何奉持諸聲聞衆□
□□從坐而起偏袒右□

(7)
□
□聞□歡喜□

(5)
共相語樂父母年高氣力衰厄終朝至暮不來借問
□索妻婦得他子女父母轉梳私房屋室

(3)
□甘□非義□非母不養

(1)
□墮草上□育臥則蘭車呑(3)苦

①右の経文はいずれも断片的であるが、一読して恩重経系の経文であることは明らかである。松本氏は『大正蔵経』第八五巻所収の敦煌本『古本』S2084（〈S84〉）を参照しながら、経文の検討をされている。いまは恩重経系の『丁蘭本』『古本』『報本』『増益本』の該当する経文と比較対校し、検討を加えていきたい。

②松本氏がすでに指摘されているように、経文はいずれも向かって左より右に向けて二行で記されている。そしてそれらが記されている短冊の配列も、まず（1）が向かって左端に配され、次いで（2）は右方に配され、（3）以下も左右交互に配されている。このようないわゆる従左向右の書法は、〈甘画〉の場合と規を一にしている。しかし経文は上段上部中央の主尊の側からみれば左右が逆となり、経文は従右向左に説かれていることになる。すなわち〈英画〉においても、経文は仏の説法であるという大前提からすれば、主尊の側からみて右を尊ぶというインド的スタンスに基づき、従右向左に記されていると考えられる。

絵画に描かれる内容は、それを観賞する側に立って構図し図画されるのではなく、あくまでも描かれる人物の側に立って描写されるわけである。〈英画〉は〈甘画〉ともども、仏画であるという点からすれば、尊右のインド的思考が影響するのは至極当然である。その点、単に経文を書写する写経のように、向かって右より左に向けて書く場合とは異なるのである。〈甘画〉や〈英画〉のようなインド的発想による尊右の思想は、少なくともそれらが描かれた時代のひとつの風潮であったとみなしうる。

③六本の短冊内の経文は、松本氏も指摘されているように、恩重経系の経本に当てはめると（1）～（7）の順に並べられる。そのうち経文（1）と（3）はひとつの短冊内に記されているため、短冊としては全部で六本ではあるが、経文としては七点あることになる。

④まず経文（1）であるが、赤子が母胎に宿って一〇ヵ月後に生まれ、蘭車に寝かされるという内容である。すなわち『丁蘭本』では（6）、『古本』では（8）、『報本』では（3）、『増益本』では（9）～（10）の経文にみられる。松本氏は「草

上」の上の「堕」は判読不能としているが、いまはなんとか判読できるとみなしたい。また「臥則」の上の「育」についても判読できるとみなしたい。「則」は『古本』の＜S07＞＜S33＞＜P19＞では「在」とあり、『増益本』の＜伊中＞では「着」、＜亮本＞＜正本＞では「著」とある。『丁蘭本』と『報本』ではそうしたバリアントはみられない。『古本』の場合も、全三四本のテキストのうち三本のみに右のバリアントが認められるだけである。それに対し『増益本』の場合は、一本も一致していない点は注目に値する。

⑤経本（2）は『丁蘭本』（6）～（7）、『古本』（8）～（10）、『報本』（3）、『増益本』（10）～（12）にみられる。それぞれにみられるバリアントのうち、まず注意されるのは、「和ㄜ弄聲」と「含咲未語」が『報本』の＜安外＞では入れかわっていることである。ちなみに『報本』の＜安内＞では、当該経文が破損しているため事情は不明である。『丁蘭本』『古本』『増益本』では＜英画＞と一致しているので、『報本』の＜安外＞にみられる右のバリアントは独特の相違といえよう。なお『丁蘭本』等においては「ㄜ」の踊り字はみられず「和」となっている。

次に注目すべきは「飢食」の「食」である。すなわち『丁蘭本』『古本』『報本』『増益本』の四本すべては「時」とある。前後の文脈からみて「食」より「時」のほうが意味はとおるので、＜英画＞の「食」は単純な誤写とみなしたい。

⑥経文（3）は（1）の下部より二行目にかけて記されている。この経文は『丁蘭本』（8）、『古本』（10）～（11）、『報本』（3）～（4）、『増益本』（12）～（13）にみられる。＜英画＞では約半分の経文が破損のため不明である。

まず「甘」であるが、松本氏は判読不能としているが、いまはなんとか類推して判読できると考えたい。

また「非義」と「非母不養」の間は破損していて判読できないが、『丁蘭本』『古本』『増益本』をみると「不親」とあるので、＜英画＞にもそうあったと思われる。ところが『報本』の＜安外＞には「非母不養非母不親」とあり、まず「非母不養」が記されたあとに「非母不親」がつづいていること、および「非母不親」の「非母」が＜英画＞の「非義」に相当すると思われることが注目される。『報本』＜安内＞の当該経文は破損のため不明である。ともかく＜安外＞についてみるかぎり、

『報本』は〈英画〉と相違した経文であることは確かであり、注目しうるのである。なお「非母不養」の「非」は、松本氏は判読できないとしているが、いまは類推判読できるとしたい。

⑦経文（4）は『丁蘭本』（8）～（10）、『古本』（11）～（14）、『報本』（4）、『増益本』（14）～（16）にみられる。松本氏は「養児」を「養兒」、「四斗」を「四升」、「罔」を「冈」と記されているが、原本を見るかぎり誤読と考えられるので訂正することにする。

まず「父母」であるが、『丁蘭本』『古本』『報本』『増益本』はいずれの場合も「慈母」とあり、独自のバリアントを示していることがわかる。また「甲中」の次の「應」は『丁蘭本』など四本には存しておらず、これまた独自のバリアントと考えられる。しかし意味の上からみて、「應」はあっても不都合はないであろう。

次に「應各有八斛四斗」の経文を検討したい。この経文の意味は、親が十指の甲中についた子の不浄を食べてしまうのだが、その不浄の量は各指ごとに八斛四斗にもなるという内容である。この経文は『丁蘭本』と『古本』では同じであるが、『報本』では〈安内〉は破損で不明だが〈安外〉には「子飲母乳八斛四斗」とあり、『増益本』の〈伊中〉には「計飯母乳各有八斛四斗」、〈亮本〉〈正本〉では「飯」が「飲」になっている。『報本』と『増益本』は細部の字句のちがいはあるにしても、子が母の乳を飲む量は八斛四斗であるという内容であり、〈英画〉および『丁蘭本』『古本』とはまったく意味が変化していることがわかる。このことは、〈英画〉は『報本』や『増益本』のような恩重経系テキストの中でも新しい部類に属さず、『丁蘭本』『古本』といった古い部類のテキストに近しいことを示しているのである。

⑧（4）の経文で「計論母恩」の部分に着目したい。この経文は『丁蘭本』に限って「論母之恩」とあり、『古本』『報本』『増益本』は〈英画〉に一致している。すなわちこの経文は、当該テキストが『丁蘭本』であるか否かを判定するメルクマールのひとつと考えてよい。したがっていま〈英画〉は、恩重経系のテキストのうち『丁蘭本』に準拠したものではないことが判明するのである。

⑨（4）の「昊天冈極」と「云何可報」の間に、『丁蘭本』『古本』『報本』『増益本』にあっては「嗚呼慈母」の経文が共通して存する。この経文はあってもなくても前後の意味は通じるが、いまあえて〈英画〉に存しないということは、それ自体〈英画〉の独自性を示しているといえよう。

⑩経文（5）からは、子が成人して家庭をもち、親不孝をはたらくパラグラフへと展開している。すなわち（5）は『丁蘭本』（24）～（26）、『古本』（34）～（36）、『報本』（11）、『増益本』（39）～（41）にみられる。

まず「□索妻婦得他子女」の□は、『丁蘭本』『古本』『増益本』と対校してみると「既」であることが想定される。ところが『報本』では「□索妻婦」の部分が「為子索妻」とあって、独自の表現に変化している。また『増益本』では「得」の代りに「娶」が用いられており、やはり独自の表現を示している。そこでこの〈英画〉の経文については『丁蘭本』と『古本』に一致しており、『報本』『増益本』のような恩重経系の新しいテキストとは一線を画していることが判明する。

⑪（5）の「私房屋室共相語樂」であるが、「屋室」が『報本』では「室内」、『増益本』では「之中」とあって相違している。また「語」は『丁蘭本』では写本により「諸」または「娯」ともあり、『報本』では「娯」とある。『古本』と『増益本』ではいずれも「語」とあるが、「屋室」の経文と兼ねあわせてみると、〈英画〉のこの部分の経文も『古本』に最も近しい関係にあることがわかる。

⑫（5）の「氣力衰厄」の「厄」は『丁蘭本』では「老」、『古本』では「老」、『報本』では破損で不明、『増益本』では「微」とあって、〈英画〉は独自の表現をしていることがわかる。

⑬経文（6）も破損個所が多く、判読可能な経文は半分以下である。『丁蘭本』では（39）～（40）、『古本』は（50）～（51）、『報本』は（15）、『増益本』は（84）～（86）にみられる。

松本氏が指摘されているように、〈英画〉には「何奉持」のあとに「諸聲聞衆」の経文があり、これは他のテキストにはみられない独自のものである。すなわちこの経文はいわゆる流通分に属しており、阿難が経名と奉持のことについてたず

ねたのに対し、仏がそれに応答しようとする部分である。ところが〈英画〉のみにみられる上掲の経文は、どのような内容を記そうとしているのだろうか。それに続く経文が破損しているため不明である。

⑭経文（7）は、ほとんどの経文が破損していて判読できない。わずかに「聞□歡喜」の経文が残されているだけである。松本氏はその上に「衆生」と記しているが、いま見る限りではまったく判読できない。また「聞□」の□の部分は、松本氏は「經」と判読され記されているが、いま写真で見る限りまったく破損していて判読不能である。はたして松本氏が大英博物館で〈英画〉の実物を披見された時点では、判読できる状態にあったのであろうか。それに対し「歡喜」の「喜」は、松本氏は判読できないとしているが、明らかにいまは判読可能と思われる。

この経文は『丁蘭本』では（43）、『古本』は（55）～（56）、『報本』は（16）、『増益本』は（91）にみられる。

⑮以上六本の短冊に記されている七点の経文を細かく検討してみた。その結果、〈英画〉にみられる経文は恩重経系に属すること、とりわけ『丁蘭本』『古本』のような古いテキストに近いこと、あえていえば『古本』に最も近似した内容であることが指摘できる。しかし〈英画〉独自の経文なり表現があることも忘れてはならない。

下段の願文など

既述のように、変相図下段は供養主なりその亡父の絵と願文などが画かれている。すなわち供養主などの説明キャプションはa～dの四本の短冊の中に、願文はeの個所に記されている。それらはすでに松本氏が解読されているが、それらを参照しつつ以下に改めて列記してみたい。

a　男學仕□

b　史中丞上柱國上□

故父歸義軍節度押衙□

c　慈母阿劉一心供養□

d　女三娘子長勝一心供養

e　併集狂伸拙？□

災障？不侵遠□

三塗□

□氏□

aは供養主について記したキャプションである。学士であるというから学者であったのか、それとも学士の官位を意味しているのであろうか。残念ながら供養主の絵はほぼ破損しており、帽子の最頂部がわずかに存するのみである。

bは供養主の亡き父親の肖像に対する説明文である。二行から成るが、向かって左行より右行に向けて書かれている。松本氏は左行最後の字は「御」であったろうと推測し、「國上」の次の字は「當」であろうかとされている。とにかく亡父は帰義軍の節度使だったのであろうか。河西方面で高位の司令官であったことがわかる。

cは供養主の母親で阿劉とよばれていたようである。「一心供養」とあるから、仏教を深く信仰していた人なのであろう。

dは亡父母の娘で長勝と名のる人についての説明である。やはり「一心供養」とあるから信心家だったのであろう。そして供養主と共に、〈英画〉製作に当たっての発願者の一人だったものと考えられる。

eの願文は、現存するものがあまりにも断片的で分量が少なく、内容を知るのは困難である。いまは松本氏が判読し発表されたものを、四行に復元して転記することにした。この四行の占めるスペースから判断して、願文全体では十五行はあったものと思われる。松本氏のいわれるように、この願文も向かって左から右に向けて書かれていたとすれば、現存の四行は右端上部にあるのであるから、願文の全体としては終り部分のごく一部に相当していることになる。

以上みたように、下段はこの〈英画〉を作るに当たっての発願者である供養主自身およびその亡父母の事蹟を記録し、子の親に対する報恩の気持を表明している。それを文章で表記するだけでなく、各人物の肖像画を描くことで、子孫はもちろんのこと、ひろくだれにも見てわかりやすい変相画となっているのである。

まとめ

六本の短冊内に残されている七点の経文を精査した結果、その経文は『古本』に属するものと結論したい。『古本』に見当たらない経文もあるが、それは〈英画〉を画いた人が用いた当時流行のテキストが、そういう特異経文を有していたということになる。とにかく〈英画〉は、『古本』の所説を図画にした変相画であると結論づけたい。

敦煌発見の〈英画〉の絵画的作風は、〈甘画〉に非常に似たところが多い。経文にせよ供養主等の説明にせよ願文にせよ、いずれも向かって左より右に書かれている点も〈甘画〉と同じである。しかし松本氏によれば、〈英画〉は「他の経変に比すれば、未だ図と文との間の緊密なる連絡を得る迄に至らず、要するに経変として完成の域に達せざるものと見做さざるを得ない」ということから、製作年代は「その描法及び諸人物の服飾等より見て、五代或は宋初の頃と推定し得る」とみておられる。

〈甘画〉が北宋の淳化二年（九九一）五月二二日の製作であることからみても、松本氏の右の判断は妥当であるといえよう。

注

（1）〈甘画〉については拙論「甘粛省博物館所蔵の敦煌発見「佛説報父母恩重経變」（〈甘画〉）について」豊山学報、第四六号、五五頁以下参照。

（2）〈英画〉の影印は松本榮一『敦煌畫の研究』附圖、六六頁、禿氏祐祥『父母恩重経和解』口絵（三）、『西域美術 ― 大英博物館スタイン・コレクション』第二巻「敦煌絵画」II、原色図版28、馬世長「《父母恩重経》写本與変相」敦煌石窟研究国際討論会文集、三一四頁～三三五頁（敦煌研究院編『敦煌研究文集』敦煌石窟経変篇の図版37、馬世長『中國佛教石窟考古文集』四七五頁に転載）、『英蔵敦煌文献（漢文佛経以外部份）』第十二巻口絵、『敦煌－紀念敦煌藏経洞発現一百周年』一二五頁などにみられる。

（3）松本榮一『敦煌畫の研究』図像編、一九六頁に、『父母恩重経』の変相画は「その作例は纔か一點を遺すに過ぎない」とあるが、同書の出版された昭和十二年三月三〇日当時は〈甘画〉の存在は知られていなかったのであろう。

（4）上掲（2）の『西域美術』第二巻三二六a。

（5）上掲（3）の図像編、一九七頁。